

特集・芸術文化の振興

文化と現代社会	林 雄二郎	2
<座談会>		
長期的観点に立った文化行政の課題		9
(出席者) 内村 直也・大島 清次・高瀬 喜左衛門 滝 淳・山本 和代・<司会>吉久 勝美		
全国高等学校総合文化祭の意義と課題	長谷川正明	28
大衆芸能の今昔	興津 要	37
<解説>		
国立国際美術館及び東京国立近代美術 館工芸館の開館	文化庁文化部文化普及課	45
各地方言収集緊急調査	文化庁文化部国語課	47
最近の著作権問題から	文化庁文化部著作権課	49

特集・我が国文教行政の現状

我が国文教行政の現状	木田 宏	51
図説 我が国文教の現状	岡本 昭	59

海部文部大臣のヨーロッパ出張概要報告	野口 昇	74
<海外教育ニュース>	大臣官房調査統計課	81
パリ圏の大学の入学制限を一部緩和(フランス)		
放送大学との単位互換制発足(イギリス)		
1981年までの高等教育拡充計画(西ドイツ)		
<文部省の窓>		
教科用図書検定規則、検定基準の改定		
	初等中等教育局教科書検定課	85
<連載第14回>		
人物を中心とした体育・スポーツ郷土史<山口県>	福井 脩治	87
霞が関ニュース		73

表紙 小林 敏子 カット 須貝夫早子

## 各地方言収集緊急調査

### 文化庁文化部国語課

「あしゅ、いんでうちのまわりをせんといかん。(私は家に帰って夕食の支度をしなくてはならない)」「

「そうかん。(そうですか)」「

「仕事をしうて、(仕事をしっ放しにして)」「

これは、「土佐弁を生の言葉で永久保存」という見出しで各地方言収集緊急調査を紹介した高知新聞(五二・八・四)に掲載された室戸市室津地区の老人たちの方言による会話である。(括弧内は共通語による場合)

方言とは、一般に、共通語と対比され、特定の地域にしか通じない言語で、もっぱら話される言語であり、その地方の人々の社会生活・精神生活の歴史的集積であると言われる。

(なお、方言の意義等について詳しくは、最近文化庁の発行した「ことばシリーズ7『標準語と方言』」を参照されたい)。

このように、方言は国語研究上のみならず文化史的にも貴重な資料であるが、社会の急激な変化に伴う国民生活様式の画一化、マス・メディアの発達、教育の普及等に伴い、各地方言は急速に消え失せようとしている。「消え行く地方独特の味わい」、また「方言に感じられる温かさとやさしさ」といった随筆や新聞投書等が目につくのは、失われ行く方言を自然の姿で保存したいとの切なる願いからであろう。こうした状況に対処すべく、失われつつある方言を緊急に調査し、記録・保存するため、昭和五十二年次から年次計画的に各都道府県に補助金を交付することとした。

昭和五十二年度は、まず、八府県(宮城県・秋田県・千葉県・石川県・大阪府・広島県・高知県・鹿児島県)を選んで事業を始めた。



宮城県での方言調査の様

次にこの調査の概略を示す。

一 調査地点  
調査地点は約五地点、その選定は、文化庁及び地元方言研究者の意見を聴いて、各都道府県教育委員会が決定する。

二 調査方法  
各都道府県は、主任調査員二名と調査員若干名を言語学（方言）、国語学（方言）の専門家から選出し、更に専門家及び学識経験者を交えて、調査地点や具体的な調査方法について検討し、その結果を基に調査を進める。

なお、方言区画は、いくつかの区域に分かれる県においては、県下の方言の状況が概観できるように、それぞれの区域から収録地点を公平に選び、特に離島など、特色の認められる方言は可能な限り収録する。

### 三 調査内容

次の調査区分により、方言の録音採集を行い、文字化（標

準語訳、注釈付き）する。

採集録音の量は、一地点一年度当たり十時間程度とし、その内有効適切な録音部分三時間程度を記録として残す。

- 老年層話者による会話
- 老年層と若年層との会話
- 目上の者と目下の者との会話
- 場面設定の会話（自然会話では得にくい各種の表現を得ることを目的として特定場面を設定し、話者に「演技的対話」をさせる。）
- 当該地域に伝わる民話

これらの調査は、自然な方言会話を良い録音で収録し、これを後世に残すのが目的であるため、文化庁では、使用する録音機の性能やマイクの取扱いなど、きめ細かな指導を行うこととしている。そして、これらの録音テープ及びその解説文字化原稿は、文化庁に提出され永久保存される。

これらの資料は、後に必ずや文化的、歴史的に貴重なものとして活用されるであろう。

〔特集・私学の振興〕

私学の振興

天城 勲

〔座談会〕

私学の役割とその振興策

(出席者)

村井 資長・堀越 克明・大石 脩而

河野 重男・△司会▽鈴木 博司

私大十考

相馬 勝夫

私立高等学校の現状と課題

清水 辛

私立財政の現状と課題

市川 昭午

△解説▽

私学の発展の推移

管理局企画調整課

諸外国の私学制度

大臣官房調査統計課

△資料▽

私学関係資料

管理局私学振興課

編集後記

◇「天災は忘れた頃にやってくる」とは寺田寅彦氏の言葉だが、忘れた頃にやってくるのは天災に限らない。社会の根本にかかわる問題も、一時的に興奮しても、あとは報道などでそんなこともあったかなと思いつくくらいで忘れてしまう。情報過多のこんにち、やむを得ないとも言えるが、こういう時代だからこそ息の長い、根気強い追究を大切にしなければなるまい。

◇「息の長い」といえば、團伊玖磨氏の『パイプのけむり』を思い出す。続々、また……と現在八冊目だが、第一冊目からかれこれ十年以上になるだろう。転変激しい出版物の中にあって貴重な存在といえる。

◇大仏次郎氏の『天皇の世紀』も息の長い作品といえる。維新の動乱をじつに精緻にそして悠々と描いており、読んでいるこちらの方がじれったくなったり根負けしてしまう。

◇本誌は大正九年に創刊されて以来五十年以上の歴史をもつが、たんに時間的な長さだけでなく、内容において、息の長いものにしたと考える次第である。

(I)

MEJ 5206 月刊 「文部時報」 11月号 第1206号

著作権  
所有

文 部 省

昭和52年11月5日 印刷  
昭和52年11月10日 発行

発行所 株式会社きょうせい

定価 180円 (千33円)

本社 東京都中央区銀座7丁目4番12号  
(郵便番号 104)

年間購読料 2160円 (千共)

(営業所) 東京都新宿区西五軒町52番地  
(郵便番号 162)

\* ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を  
申し受けます

電話 東京(268) 2141(代表)  
振替口座 東京9-161番  
印刷所 株式会社 行政学会印刷所

\* なお、購読の申し込みは、直接営業所または  
もよりの書店にお願いします